

11月は、4日～5日(土～日)親子孫講座「磁石」が中野で行われ、助手をしました。板書で報告したかったのですが、その後デジカメ Sony ブロギーがとうとう壊れて電源が入らなくなってしまい、撮っておいた写真・動画を取り出せなくなりました(ブロギーは内蔵データ保存でSDカードなどに保存ではない)。カメラのキタムラに、データ復元できるか修理依頼中ですが、取り出せてもデータ量により1万5千円～数万円程度かかるそうです。高いなあ。

11日(土)は「まちかど科学クラブ」(上田創造館)で「磁石」受講中です。渡邊先生が(まちかど通信にも書かれましたが)「来年度はまちかど科学クラブは継続しない」とのお話をされました。今年度まで9年間も継続して来られて、感謝であります。私が引き継げればいいのですが、今の状況では厳しいです。12月末までに申請できるか検討します。

このほか、東御市特別支援教育担当者会・特コ連絡会のブロック長なので、13日(月)に、(一昨年夏に福祉実習した)東御市社会福祉協議会の、佐藤もも子さんに講演会をしていただきました(10月にも一回行った)。講演会の事務運営は久しぶりですが、講師選定と打ち合わせ、当日までの参加者募集・宣伝、会場準備や受付事務・司会・講師謝礼など様々あり、一人で行うのは結構大変だと改めて感じました。でも、講師が別にいるので、当日は受講者として聞くことができ勉強になるのでいいです。講師と事務局全部を一人でやることはさらに大変なことだと予想します。親子孫講座や大道仮説講座は、渡邊先生や遠藤先生がそれをやっている、私は当日の助手だけなので、気楽にしていますが、事務運営の方が大変だと実感します。

14日(火)には、あおば学級グループSSTのCT(チーフ)として研究授業も行いました。指導者は長野大学社会福祉学部の丹野先生。そんな大規模な研究授業ではないですが、一応指導案づくりや教材準備など、これも結構大変です。研究授業などしばらくやってなかったのが、授業力は確実に低下していますね。

さて、今回もまたまた、資料の紹介ばかりのレポートで、すみません。

(1) 以前、NHK+で放映された、「笑わない数学」【虚数】を録画しておいて見たらなかなか面白かったので、紹介します。以前このシリーズの「暗号理論」について紹介したことがあります。

信濃教育会教育研究所の時に指導を受けた青木善保先生は国語の先生で良寛研究者でもあり詩人でもありますが、何年か前の年賀状に「このごろ虚数に興味をもっています」と書かれていたことが記憶に残っています。国語の先生が興味をもつ虚数の世界について具体的に聞いてみたいものです。私としても、数学史的にもたいへんためになりました。このシリーズ、なかなか面白いです。著作権の関係があるので、映像をスラックにアップはできませんが、当日ご覧ください。

(2) 月刊誌『たのしい授業』すらこの頃あまり読んでいない状況ですが、珍しくガリ本リストから『会員レポート』9月号を注文しました。この夏の霧島大会の資料も掲載されているとのことでしたので、(九州になぞ当然)参加できなかったのが、この頃の大会資料ってどんなものかなあと、見てみたいと思ったからです。

その中から、和歌山の西本紀彦さん(若い頃障害児教育関係で研究紙を購読していた記憶あり、なつかしい)の、「ごめんねいよ」指導について、および兵庫の出口陽正さん(算数数学を主に今でもいろいろと研究実践されているなあ)の「ボクと授業記録」「中学時代の仮説実験授業が残したもの」の資料が興味深かったので、紹介します。ご本人にアポを取って転載を了承してもらおうべきだと思いますが、スキャンしてPDF化して紹介しても、研究会内なら許してもらえますかね。

西本さんの資料のような事態と対応は、現場ではしょっちゅう起きますので、望ましい指導(支援)のあり方について、考えさせられました。出口さんの言う「授業記録」、自分はあまり取って来なかったのですが、授業記録を取って振り返ることの研究的実践的意義はとっっても感じています。そういえば佐久では「授業記録を読む会」という研究サークル(社会科の初志を貫く会所属の実践者が多い会でしたが)がありましたね(今もあります)。感想文も大事ですが、授業記録を取って振り返ることを(研究的にも)してみたいものです。

【今日は、以上です】

「ごめんねいいよ」指導について

和歌山県・支援学校 西本紀彦

先日参加した「たのしい障害児教育 夏の合宿研究会2023 in 新大阪」で、『その指導はしない』（めがね旦那・著 東洋館出版社）という本を紹介してもらい、「ちょっと面白そうだなあ」と思い早速 Amazon で注文しました。

この本に書かれてある「めがね旦那さんのプロフィール」からどんな人か紹介してみます。

めがね旦那

1987年生まれ。育児休業中に始めたTwitterで独自の教育観に基づくツイートの発信を始めると開始数ヶ月でフォロワーが2万人を超える。学校の「当たり前」に対して疑問を投げかける内容の投稿が多い。特別支援教育や不登校対応にも関心があり、独自の実践を重ねている。また働き方にも注目を集めており、2020年度には学級担任をしながら定時通勤かつ休職時間取得という前代未聞の快挙を達成した。（持ち帰り仕事も一切していない）。3児の父であり、妻も小学校教員である。

この本は、「第1章 学習規律編」、「第2章 学習指導編」、「第3章 生活学習編」から構成されてそれぞれ7つから10程度の項目の内容が示されています。

例えば「体育の授業でピシッと並ばせる意味」、「宿題は残業と同じ」「感謝の手紙で感謝嫌いになる子ども」、「ごめんねいいよ指導」「給食指導の闇」などの話が独自の目線で語られています。

その中で、私自身もいつも指導をどうすべきか悩んでいた「ごめんねいいよ指導」について書かれていたので、その内容を紹介したいと思います。

ごめんねいいよ指導

学校現場で一番多い仕事は「児童間のトラブル対応」かもしれません。それもそのはずで、子どもたちはまだ「他人との適切な距離」を掴めていません。トラブルを繰り返しながら、自分と相手の心地よい距離感を掴んでいくものだと僕は考えています。だからこそ、トラブル対応は小学校教育の神髄であると信じている僕が不満をいっている指導が「ごめんねいいよ指導」です。

二人の児童が喧嘩をしています。話を聞くと、片方が手を出してしまったらしいのです。喧嘩の仲裁をした先生が双方の話もそこそこに「じゃあ、謝りなさい」と言い、加害児童が「ごめん」と言います。被害児童はそれに対して「いいよ」と言う。これで解決したという指導です。

この書き方だけだと、なんでこんな指導がまかり通っているのかと不思議に思う方もいるかもしれないので、少し補足説明をさせてもらおうと、おそらくこの指導の目的は子どもの気持ちに「区切り」を付けるためかと思います。「謝罪」にたいして「許し」をさせることで、問題を終わらせて次の活動につなげようとする。おそらく、保育園や幼稚園レベルでは割とよくある指導なのだと思います。実際、それくらいの年齢の子どもたちはこの「ごめんねの儀式」と言われる指導で気持ちに区切りを付けられる子どもが多いそうです。

さて、それではこの指導がそのまま小学校でも行われることはどうなのか。もちろん、この指導で気持ちに区切りを付けることができる子どもがいないとは言いません。子どもの心の年齢は実年齢通りではないこともたくさんあるでしょう。でも、そうだからこそ、トラブル対応にはもう少し慎重になるべきという意見もまた尊重されるのかと思います。

教員側の都合の話をする、実は「児童間のトラブル対応」は当該児童だけの問題ではないのです。その子どもたちの保護者もその行方を気にしていることがあるのです。子どもがモヤモヤを残して帰ったあとに、保護者にそのトラブルのことを話して、保護者がその件について学校へ電話をかけて内容を詳しく聞くということはもはや日常茶飯事です。そのときに教員側の言い分として「謝罪と許し」があったことを伝えるのです。一応の対応はしましたよ、というアリバイ工作になってしまっている側面が見え隠れします。でも、こうなってしまうのは、それはもうトラブル対応ではないですし、冒頭で述べた「トラブル対応は小学校教育の神髄」という言葉が寂しく響きます。

実はこの「ごめんねいいよ指導」にはさらなる弊害があります。それは子どもの認識に及びます。つまり、このような指導を繰り返されてきた子どもたちは「ごめんねと言えば、いいよと言ってもらえる」という誤った学びをしてしまうことがあるのです。でも、人間の心はそんなに簡単ではありません。謝られても許せないこともあるでしょう。しかし、「ごめんねの儀式」にはその「余白」がありません。なぜなら、その目的が「区切り」を付けることなのだから。実際、子どもたちはこんなことを教師に訴えてきます。

「あの子、僕が謝ったのに許してくれない！」

これは対人関係における大きな歪みではないかと僕は危惧しています。

ここで、僕のトラブル対応の方法を紹介します。

まずは、双方の話を一人ずつ聞きます。このときの注意点としては「話を割り込ませない」です。興奮している場合もあるので、落ち着いて話せる子どもの方から話してもらって、それを聞きながら落ち着いてもらうクールダウンの時間にしてもいいかもしれません。そうやって一人ずつの話をしっかりと聞いた上で、僕がそのときに起こった出来事をはじめから終わりまでストーリーにして話します。そして、双方にそ

れで間違いがないかを確認します。間違いがあれば、丁寧にストーリーを訂正していきます。このようなトラブルのほとんどは教員が見ていない所で起こるので、このストーリー作りが大切です。

ストーリーの確認作業が終われば、あとは、教員がそれを聞いて感じた点を双方に伝えます。「手を出す前に口で気持ちを伝えればよかった」など、次に同じような場面があったときの対応をアドバイスします。

最後に、双方に「言い足りないことがないか」を必ず確認します。どうしても教師側が主導で話を進めがちになってしまうので、複数回、子どもたちが話をする機会を作ります。

ここまでの対応をすると、やはりどうしても時間がかかります。休み時間の10分間で終わらないこともしばしばあります。しかも大抵のトラブルは、休み時間の終わりに起こるので、授業開始のチャイムからトラブル対応ということもあります。そんなときには「この授業が終わって、まだ話したいと思うのならおいで」と声をかけるときもあります。気持ちを切り替えるのが上手なのもまた子どもです。トラブル対応をあえてしなくても次の休み時間にはまた遊び出すということも、これまたよくあります。そういった場合には、時間のあるときに「さっきのトラブルどうする？」とこちらから聞いてあげてもいいかもしれません。大切なのは子どもの気持ちに「モヤモヤ」を残さないこと。不満は時間が経って増幅することもしばしばあります。

でも、その「モヤモヤ」が生活指導において大切になるケースも合わせて紹介します。例えば、加害児童の行いがどうしても許せない被害児童がいた場合は、加害児童に「ごめんね」を言わせた上で、被害児童に「いいよ」を言わせないというものです。

「あなたのしたことはとてもひどいことです。だから、すぐには許してもらえません。これからのあなたの振る舞いを先生たちは見えています。『ごめんね』には『もうしない』という意味も含んでいますよ。」

このように加害児童に「区切り」を付けさせない。このような指導も大切なのかと考えます。

「ごめんねいいよ指導」

『その指導はしない』めがね旦那・著 東洋館出版社 p.100~p.105 より転載

私は現在、知的障害の特別支援学校の小学部2年生の子どもたちを担任しています。「自分が遊んでいたおもちゃを友だちが何も言わずに盗った。」「何回おもちゃを貸して言っても貸してくれないから、友だちの頭を叩いた。」など日常茶飯事です。

そんな時は、とりあえず双方の話を聞いて状況を確認するということはしていました。しかし、子どもたちの心の「モヤモヤ」はなかなか解決せずに時間だけがどんどんたっ

ていく中で次の活動の時間が迫ってきます。それで、とりあえず「この場の区切りをつけさせたい」という思いだけで、加害児童に「ごめんなさい」を言わせて被害児童が「いいよ」と言って区切りをつけさせるという感じで終わっていることがほとんどでした。でも、子どもたちは「モヤモヤ」を心の中に残したままだったと思います。

ここで、今まで私がやっていなかったことで「めがね旦那さんがやっていること」を見てみたいと思います。

ここで、僕のトラブル対応の方法を紹介します。

まずは、双方の話を一人ずつ聞きます。このときの注意点としては「話を割り込ませない」です。興奮している場合もあるので、落ち着いて話せる子どもの方から話してもらって、それを聞きながら落ち着いてもらうクールダウンの時間にしてもいいかもしれません。

私が児童から話を聞く時に「話を割り込ませない」ということをあまり意識していませんでした。そのために、話が何度もいったりきたりしてなかなかトラブルの全体像を捉えることができにくかったのです。

そうやって一人ずつの話をしっかりと聞いた上で、僕がそのときに起こった出来事をはじめから終わりまでストーリーにして話します。そして、双方にそれで間違いがないかを確認します。間違いがあれば、丁寧にストーリーを訂正していきます。このようなトラブルのほとんどは教員が見ていない所で起こるので、このストーリー作りが大切です。

ストーリーの確認作業が終われば、あとは、教員がそれを聞いて感じた点を双方に伝えます。「手を出す前に口で気持ちを伝えればよかった」など、次に同じような場面があったときの対応をアドバイスします。

この「ストーリーにして話す」ということを私はできていませんでした。ストーリーにして話すことで加害児童も被害児童もそのトラブルについて客観的に捉えることができるようになると思われます。一手間の作業ですが、こういうことが「急がば回れ」ということなのだと感じました。

最後に、双方に「言い足りないことがないか」を必ず確認します。どうしても教師側が主導で話を進めがちになってしまうので、複数回、子どもたちが話をする機会を作ります。

「言い足りないことがないかを確認する」ということもできていませんでした。子どもの心の中に「モヤモヤ」を残さないということが、安心して気持ちよく過ごすことができる教室環境作りにとっても大切だと感じました。

2023.8.31 夏休み終わりの日に

ボクと授業記録

篠山仮説サークル 出口陽正

●ボクの初めての授業記録

ボクが初めて授業記録を書いたのは、1985年の《ばねと力》の授業記録でした。その前年から臨時免許の理科で仮説実験授業を始めたボクでしたが、1年目のボクの仮説実験授業は今から考えるとめちゃくちゃでした。初めての授業書は《三態変化》でした。授業書を買わずに『仮説実験授業研究第8集』（仮説社）をコピーして授業しました。もちろん『仮説実験授業記録集成5 三態変化』（国土社）のような本に実験上の解説が書いてあることなども知らずに授業を始めたのです。

予備実験がいかげんなまま授業に突入し、子どもたちがさんざん討論した問題の実験結果がよくわからなかったり、次の問題の答えがわかったりもしました。二酸化炭素のスプレーがあることも知らずに、「あるつもりで考えて」と言うなど、今思い出しても顔が赤らむような授業でした。続けてやった《もしも原子がみえたなら》は、色ぬりもせず、研究会で買った分子模型を見せるだけで、今考えれば信じられないけれどたった2時間で終わってしまいました。そんな授業でも子どもたちは支持してくれて、ボクは仮説実験授業の道を歩き始めました。でも、当時のボクは子どもたちの意見や感想に対する期待が大きすぎて、自分の理想の授業に子どもたちの姿をあわせようとしていました。そして、「どうもうまいかない」と思うことがよくありました。

《ばねと力》の授業書をやったのは、「典型的な仮説実験授業を原則通りにやることで仮説実験授業を深く学びたい」と思っていた頃でした。当時は犬塚清和さんが「授業記録を書かないやつは信用しない」と言っていました。当時のボクは、その言葉にドキリとしたものです。でも、一方で犬塚さんは、「仮説実験授業をやっているといっ

たって、それがどんな仮説実験授業なのかわからない。あなたの仮説実験授業をボクに見せてほしい」「授業記録を書くことで仮説実験授業を学んでほしい」とも言われていました。

当時のボクは数学の教師でありながら、臨時免許の理科で仮説実験授業をやっていたので、次の年も理科が持てるかわからない「明日なき理科教師」でした。そんなボクだったので、自分の実践の証として授業記録を書きたいと思うようになったのです。

そんなボクに鮮烈な印象を与えたのが山田正男さんの《トルクと重心》の記録に書いてあった犬塚さんの言葉でした。

書かなければ、「自分」が見えません
書かなければ、認識できません
書かなければ、書けるようになりません
書けば、必ずいいことがあります
あなたの「授業記録」を待っています

授業記録を書くことに決めたものの、ボクの心の中には「仮説実験授業を始めたばかりのボクが、仮説実験授業研究会の会員相手に何を書いても誰も読んでくれないのではないか」という気持ちがありました。でも、このほんの数行の言葉はボクに対して、「なにより自分の実践の証のために、そして、自分自身が仮説実験授業を学ぶために授業記録を書けばよいのだ」と思わせてくれました。

といっても、初めての《ばねと力》の授業で全記録を書けるほど強い意志が自分にあるようにも思えないのも事実でした。そこで、「こうなったら後にひきさがれないように自分を追い詰めてしまおう」と、なんと犬塚さんに「ボクは《ばねと力》の全授業記録を書きます。こう書いたら、後にはひきさがれませんからね」と手紙を書きました。何か自分をかけるくらいの迫力がないと、新しい動きというのはできないのかもしれないかもしれません。

1984年の年末に、「板倉式発想法の会」が三河ハイツでありました。そのときに板倉先生が「授業書の問題を子どもたちにいかにイメージさせるかが重要である」という話をされました。当時は、子どもたちに押しつけを排除するための授業運営法がみんながいされ、「授業書以外のことは何も言うてはいけない」と多くの人が思っていました。このときに板倉先生が〈問題文の途中で子どもたちの知らないモノが出てくれ

ば、そのつど見せる)〈実験道具を使いながら実験直前まで見せる)ということをお話してくださいました。具体的な例として〈水に砂糖をとかしたら、重さはどうなるか)という問題なら、実際に砂糖が水にとけるところを見せて、台ばかりの針が見えないようにして実際にのせるところまで見せてもよい)ということをお話されたのです。その場にいた多くの人は「そんなところまでやっていいのか)という反応でした。板倉先生はそれに対して「知らない言葉やモノが出てきたら、そのつど説明したり、見せたりするのは、会話を成り立たせる原理だ)と言われました。問題の説明の重要さは、その後、西川さんが授業書個別の展開の仕方を具体的に示しながら一般化して下さり、その後の〈授業ノートの作成運動)につながってきたのです。

そのときに板倉先生は、「そういう問題の説明や実験する教師の動きを入れた授業記録を書いてはどうか)という提案もされました。その板倉先生の話から、初めての《ばねと力》の授業記録は、ボク自身の問題の説明や動き、それだけでなく授業運営で気づいたことなど自分の思いも入れた授業記録を書きました。今、その授業記録を読んでもみると、仮説実験授業を始めたばかりの自分の姿が感じられて爽やかな気持ちにさえなります。

あるページには、『仮説実験授業-授業書《ばねと力》によるその具体化-』(仮説社)の西川さんの授業と同じような授業の展開になり、授業書の科学性に興奮する自分の姿があります。あるページには、お話がうまく展開できなくて「誰かお話の読み方を教えて下さい)なんてことも書いています。また、あるページには、子どもたちが議論していることがちっともわからなくてひたすらチャイムがなるのをまつ若い頃のボクがいて、その数ページ後には、子どもたちの発言をテープで聞きなおしてみても子どもたちの発言の内容に気づく若い頃のボクを発見することができます。また、あるページには実験がすんだあとに、「え〜、そんな実験をするんだったの〜!)という子どもたちの声に焦るボクがいて、その数ページ後にはテープを聞きなおしてみても、自分の問題の説明の不備に気づくボクがいます。それだけではありません。授業する前にはよくわからなかった問題配列の意味や授業書の構成を子どもたちとの授業を通して感激して理解するボクの姿があります。そして、なにより目に見えない力の世界を喜々として学ぶ子どもたちの姿に感動して、仮説実験授業のすばらしさと子どもたちのすばらしさを熱い思いで書き綴るボクがいるのです。

こうして、昔の記録を読んでもみると、「ああ、確かにボクは授業記録を書くことで、授業書の構成、授業運営、子どもたちの発言の意味や子どもたちの認識のしかた、ひいては仮説実験授業そのものを学んできたのだなあ」と思えるのです。

●授業記録を書くということ

ボクが教師になって1年目が終わろうとする1983年3月に雑誌『たのしい授業』（仮説社）が創刊されました。当時の『たのしい授業』には小原茂巳さんや伊藤恵さんの1時間ものの文学的な授業記録がよくのっていました。これは仮説実験授業研究会の中では画期的なことだったようです。ボクもそのような1時間ものの文学的な授業記録にあこがれていました。小原さんやメグちゃんの書く記録というのは視点が定まっ
ていて、そういう記録を書いてみたいなあと思いましたが、ボクにはそんな記録は到底書けないと思えました。

《ばねと力》の授業記録以後、ボクは授業記録を書きながら仮説実験授業の実践に没頭しました。しばらくは、授業をしながら授業通信を出すということではできませんでしたが、子どもたちがあまりに喜ぶものだから、授業通信としての授業記録という形で出すことが多くなりました。

もともとボクが全授業記録を書こうと思ったのは、「1時間ものの文学的な授業記録を書くことはボクにはとうていできない、だけど淡々とした全記録ならボクにも書ける」ということからでした。しかし、全記録を書き続けていると、不思議なもので、子どもたちの見方や授業書への理解に対する視点が定まってきました。おそらく量的変化が質的变化をもたらしたのでしょう。

自分の授業を録音して聞いてみると、「子どもたちがザワザワして集中していないと思っていたら、案外聞いてくれているじゃないか。ボクがイライラしていただけだったんだ」ということを発見することがあります。また、「アッ！ この子こんなにいいつぶやきしているのに、オレは気がついていないじゃないか」「ここはこう説明できていればよかったのに」と思うことがあります。授業記録を書いたことのある人は、おそらく誰もが経験していることだと思います。

授業記録を書くという行為は、自分の授業を聞きなおして、自分の問題の説明や子どもたちの発言を書き留めていく行為です。つまり、授業記録を書くという行為を通して、自分の授業を客観化して子どもたちの思いや動き、そして、自分の授業運営を見直し、授業書に対する理解を深めるもっともよい方法であるように思います。

犬塚さんがしきりに仮説実験授業を始めたばかりの若い人たちに授業記録を書くことを薦めていたのは、犬塚さん自身が〈授業記録を書くことが授業書と子どもたちへの理解を深める最短距離である〉ということを知っていたからでしょう。

●授業記録を書くことで得たもの

ボクはかつて「来年理科をもてるかどうか分からない」数学教師として10年ほど仮説実験授業を実践してきました。この10年ほどは理科専科などで〈毎日が仮説実験授業〉なので、授業書をするのに手に汗をにぎるということもなくなりました。でもかつては、本当に手に汗にぎりながら授業書をやるのがたびたびありました。毎年、3学期の最後の授業書となると「これが最後の仮説実験授業になるかもしれない」と思っていました。そして、ときには最初の時間に足が震えたこともありました。

毎年のように「今年で仮説実験授業をやるのは最後だ」と思いながらの実践でしたが、今となっては、その不安定さの中でボク自身は迫力ある実践ができたように思えてなりません。ボクにとっての授業記録を書くということは、ボク自身が仮説実験授業を学ぶための手段であると同時に子どもたちとのたのしさの連帯の手段でした。しかし、それ以上に授業記録を書くということで、自分が仮説実験授業とかかわる時間を多くできたことが重要であったように思えてなりません。

ふつうの学校生活の中では、いろいろ気になることがあります。いろいろな雑用もある、生活指導で走り回ることもあります。でも、自分自身に対して授業記録を書くことと束縛することで、自分の中の仮説実験授業を大切に守り続けることができたように思います。授業書を読み実験道具を準備し問題の説明を考える。そして、子どもたちとの授業。それだけでなしに、テープを聞き、一人ひとりの感想に目を通しながら授業記録を書き、それを印刷する。その時間は、授業する時間の数倍にもなります。しかし、テープを文章化し印刷する時間は、授業書の構造や自分の問題の説明や子どもたちとの対応の仕方など授業運営について、さらに、子どもたちが授業書を通して科学の原理・法則を獲得していく認識過程を考える貴重な時間になりました。さらに、授業記録を書く中で授業のときには気づかなかった子どもたちの気持ちなども少しずつわかるようになってきたように思えるのです。

それだけではありません。数学教師であるボクは「たのしい科学の授業＝仮説実験授業」にあこがれながら、「たのしい数学の授業」を求めてきました。《2倍3倍の世界》《図形と証明》《落下運動の世界》《本当の数とウソの数》《1と0》などの数学の

授業書開発ができたのは、仮説実験授業の授業記録を書きながら学んだことが土台になっているからなのです。

●仮説実験授業の正しさを証明し続ける授業記録

仮説実験授業は授業書という概念を発明することで、授業科学の道を拓きました。仮説実験授業研究会の多くの人たちにとっては仮説実験授業の正しさはすでに疑いのない真理でしょう。しかし、まだまだ一般の教師たちにとっては認められていない部分がたくさんあります。それでは、仮説実験授業の正しさを証明することができるものは何でしょうか。ボクは、授業書による実践とその授業記録だと思っています。すでに定評のある授業書の授業記録だって、それを書きつづけ発表し続けることが、何十年もかわらぬ真理としての仮説実験授業の正しさを証明し続ける大切なことだと思うのですが、どうでしょうか。

授業記録といっても、いろいろな授業記録があります。授業記録を分類してみれば、子どもたちとのたのしさを共有するラブレターとしての授業通信。授業書、特に作成途上の授業書(案)であれば、研究用としての授業記録。さらに、教師の問題の説明などに視点をおいた授業記録、これは授業ノートに近い授業記録といっているのかもしれない。

だから、授業記録といってもまずは自分の目的意識が先で、子どもたちとのたのしさを共有することをまず目的とするのか、研究用を意識して記録を書くのか、また、問題の説明など授業運営に役立つ記録を書くのかで、書き方は異なってくるでしょう。一番書きやすいのは、子どもたちへのラブレターとしての授業通信です。それは誰に対して書くのかという対象がはっきりしているからです。

じつは、この1年間ボクは夢中になって授業通信を書き続けてきました。1年前、6年生のステキな感想文に感激して《もしも原子が見えたなら》の感想文集を子どもたちに配りました。すると子どもたちがとても喜んでくれて、それに感激して、それ以後の授業はほとんどすべて授業通信を書いてしまいました。《燃焼》《月と太陽と地球》《てことトルク》《自由電子が見えたなら》《2倍3倍の世界》……もう昔のような体力もないし、右目の病気のことを考えれば健康上はよくないのですが、ついたのしくて子どもたちとボクのたのしい今を記録しておきたくなったのです。この歳になって、子どもたちにラブレターを書き続けられる自分がうれしかったです。

かつてボクは「授業記録を書くことが、ボクにできる研究だ」と自分の授業記録に書いたことがあります。その思いは今も変わりません。自分自身が仮説実験授業を学ぶためと子どもたちとの連帯のため、そして、仮説実験授業の正しさを証明し続けるために誰にでもできる研究、それが授業記録を書くことだと思のですが、どうでしょうか。

(2013.4.30)

【追記】

この文章は 1994 年に書いた「ぼくはなぜ授業記録を書くのか」に少し手を加えたものです(印象に残る授業記録は省略しました)。伊勢革観さんから「授業記録を書く意義について話を聞きたい」と言われ、昔書いた文章を読み直してみました。自分の中の授業記録を書く意義というのは今もこの文章に書いていることと変わっていません。ただ、最近新たに思うことが一つあります。それは、授業記録にしても実践記録にしても、書いておかなければ何も残らないということです。

退職後、1年8か月ほど産休代替として理科の他に図工も教えることになりました。ボクを応援してくれる黒田康夫さんの誠意に誠意でもって応じるため、〈模倣美術の授業書〉の授業記録を書き送りました。それは、『模倣美術に魅せられて』というガリ本になりましたが、改めて読み直すと、自分の当時の思いも子どもたちの反応も、すべて実践の証として残っていることを感じます。そう、当たり前の話ですが、書かなければ何も残らないのです。そして、どんなにたのしかった授業も、授業記録がなければ「たのしい思い出」にすぎませんが、授業記録があれば先生も子どもタイムスリップして当時の教室を生き生きと思い出すことができます。これはつい最近発見した、授業記録の意義です。やっぱり、ボクにとっては、授業記録は生きている証なのです。

2023.7.26

中学時代の 仮説実験授業が残したもの

30年前の教え子からの手紙

篠山仮説サークル 出口陽正

●三児の父となった教え子との再会

退職して3年目、今年は週に3日、4年生から6年生3クラスの理科の授業だけを教えることになった。学校は週に3日とはいえ、自治会長の仕事が多く忙しい毎日だ。8月4日のこと。地域の文化祭の実行委員会に出席したら、30年前に中学で理科を3年間教えた山本圭太君に出会った。彼も小学生と中学生の三児の父親になっていた。

ボクは中学校の数学教師だったが、教師3年目から臨時免許で理科を教えることになって仮説実験授業の道を歩き始めた。その中で、初めて3年間理科を担当し、自然科学の授業書を夢中になって実践したときの教え子が山本君だ。久々の再会で話すことといえば、もちろん仮説実験授業の話。「圭太のときは、ほとんどの授業書でノーミソ通信（授業通信）を書いて夢中になって実践していたときだった。今もいくつかノーミソ通信が残っているよ」と言うと、彼は「ぜひ読みたいです」と言ってくれた。

彼と出会ったのは1991年4月。その前の2年間は臨時免許で理科がもてなかったもので、3年ぶりに仮説実験授業を実践できて、ボクは水をえた魚のように夢中になって授業した。1年生のときは、《もしも原子が見えたなら》《燃焼》《ぼねと力》の授業書をした。2年生のときは、《溶解》《結晶》《自由電子が見えたなら》《電流》、3年生のときは、《電流と磁石》《水溶液とイオン》（《程度のもんだい》第3部）《浮力》《電子レンジと電磁波》の授業書をした。

どの授業書も思い出が多いのだが、特に卒業直前に受験勉強と平行して行った《電子レンジと電磁波》では、最後板倉聖宣さんの「たのしく学びつづけるために」を読んだから最後の感想を書いてもらった。「目に見えない世界が見える」「磁場がわかった」という哲学的な感想文や、自分たちは仮説実験授業を受けることはもうないのに（だから）、「中学生に勉強の楽しさを味わわせてほしい」「仮説実験授業のたのしさをいろいろな人に教えて下さい」「もっとたくさんの人に仮説実験授業をうけてほしい」というヒューマニズムに満ち溢れた感想文があった。

仮説実験授業をとびとびでしかできない中学校では、「仮説実験授業をやっても、大部分は押しつけの勉強をしているのだから、積み木崩しと同じことではないのか？」と思ったこともあった。しかし、彼らとの仮説実験授業を通して、ボクは「中学生は自分の予想以上に多くのものを学んでくれた」と思えたものだった。

さて、家で彼らとの授業記録をさがしてみたら、《燃焼》《ばねと力》《自由電子が見えたなら》《電子レンジと電磁波》の授業記録が残っていた。そして、知り合いを通じて、それらの記録を彼に渡した。そのとき次のメッセージもそえておいた。

中学時代の仮説実験授業をふりかえって、当時生徒として仮説実験授業を学んで感じたこと、大人になってみて感じていることなどを文章にしてくれませんか。そうしたら仮説実験授業を実践している若い先生たちにも励みになるんじゃないかなと思っています。まあ、無理にとは言いませんので、書くことがあったら教えてくれるとうれしいです。それではまた！ 心も体もお元気で。 8.10

すると、数日後、彼からお礼のメールが届いた。その中に「中学校3年間の理科の授業は僕の宝物です」と書いてあった。ボクが感激して返信すると、また次のようなメールが届いた。

今まさに仕事終わりの机で《電子レンジと電磁波》を読んでいた。今見ても楽しい実験。あの頃と同級生の顔が思い出され、素敵な時間です。もう少しじっくり読んでみます。 8.17

そして、ボクは彼からの文章を心待ちにしていた。子を持つ親となった彼が、当時の仮説実験授業をどのようにとらえているのか、それはとても興味深いものだった。

11月1日、待ちに待った彼からの文章が届いた。そこには中学時代に彼が仮説実験授業からえたものが、シャープに書かれていた。また、三児の父としての願いも書かれていた。中学時代の仮説実験授業が残したものの確かな証言として、全文を紹介したいと思う。

●知ることが好きになる、先生が好きになる、友達が好きになる、学校が好きになる

久しぶりに出口先生にお出会ったのは、地域の行事の役員会でした。ちょうどそのころ、小中学生の息子達から聞いた言葉にショックを受けた頃と同時期でした。

学校での授業の話をしていました。子どもら(小・中3人の息子)に「授業は何が面白い?」と聞いたときに「理科」といった子はなく、「理科は?」と聞いたときに、「別に面白くない」と言われ、僕は大きな声で「ウソや!」と言ってしまいました。僕の中学校の理科の授業の思い出は、「楽しくて仕方ない」だったからだと思います。(ちなみに僕は勉強全般が好きというタイプではありません...)

中学校3年間の理科の授業は出口先生に受け持っていただきました。教科書はほどほどに、先生の授業は「問題→仮説→討論→実験」という流れで進みます。問題が出され、それについて自分なりに考え、みんなで意見を出し合い、時には違う答えの意見に納得し自分の仮説を変更し、時には自分の仮説の発表により他の子たちが自分の意見に賛同してくれる。そして、実験により、目の前でその仮説について答え合わせができる。今思えば、生きていくうえで大切なことを学んでいたんだと改めて感じます。当時はただただ皆と話し合い、実験の結果を目の当たりにし、一喜一憂していたのですが。

自分の仮説や考えを、みんなと共有、討論する楽しさ、自分の仮説に賛同してくれる喜び、仮説が当たった時の喜びや、期待を裏切られた時の驚きは、学ぶこと(発見すること)の楽しさを授業の中で体験できました。また、自分には考え付かないような発想を、友達が持っているのだということを知りました。それは、出口先生がどんな意見でも言えるような雰囲気を作ってくださったからなのかもしれません。

当時、子どもながらに「出口先生の授業は楽しいけど受験対策もしっかりしてほしい」という大人の話を目にしたことがありました。子どもながらに、こんなに学ぶことを楽しく、ワクワクさせてくれる授業を否定されたようで、腹が立ち、絶対にほかの学校の子たちに負けない点数を取ってやると思ったし、高校に行ってからでも理科は興味をもって授業を受けることができました。

「ふ～ん、当時そんなことを思ってくれていたのか」と思うボク。当時、精神的に闘いながら実践していたことを思い出した。じつは、彼らを教える前年は「同一歩調を乱す」と全職員から担任はずしをさせられた。数学の授業で受験勉強と平行して行っていた《コインと統計》をやりにあげられ、「私達は、テストの点を1点でもとらせようと思ってがんばっているのに、何を考えているの!」となじられた。そんなこともあり、小学校の免許を通信教育で取り出した。それで40年の教師生活の後半の20年は小学校で仮説実験授業をやっているのだから、人生とはおもしろいものだ。さて、彼の文章はまだ続いた。

出口先生の授業は社会人として大切な、「自分なりに考えること」「人と意見を交わすこと、耳を傾けること」「実際に体験し知ること」を楽しく教えていただいたように思います。数十年ぶりに「ノーミソ通信」を見せていただき、卒業日誌や修学旅行の文集を見るような思いで、懐かしく見させていただきました。教室の風景や、当時の友達の色や形はいまだにすぐに目に浮かびます。パネの実験では、自分なりに課題を作り、「この問題はつかえるな」というようなことを言われたのは嬉しかったです。電子レンジを使った実験では、見えない電波がまるで目に見えるように、レンジの仕組みがよくわかりました。マグネシウムが燃えた時の強い光はいまだに目に焼き付いています。「勉強した記憶」ではなく「思い出」として心に残っているのだと思います。

義務教育の年代は、知ること、覚えること、考えることももちろん大事だとは思いますが、まずはそれらは面白いこと、興味深いことなんだということを感じる事が大事なんだと今も思っています。知ることが好きになる、先生が好きになる、友達を好きになる、学校が好きになることが、何よりも人生を豊かにしてくれるのかなと思います。

〈知ることが好きになる、先生が好きになる、友達が好きになる、学校が好きになることが、何よりも人生を豊かにしてくれる〉という彼の言葉が心に響いた。たのしい授業を体験した子どもならでは言葉ではないかと思うのだが、どうだろうか。

●他人と比較するのではなく自分が楽しいと思える何かを探し続けられる力を

3人の息子を持つ親となった今当時のことを思い出しながら、子どもの成長を見ていると感じることはたくさんあります。

同級生と同じ時に同じ問題を同じ時間で解くと、どうしても差は出ると思います。その差によって人生の分岐点で選択肢が変わってくることも理解しています。ただ、高い点数を取ることを目標にしてしまうと、周りの子と比較し、うまくいかなかった自分を責めることにつながってしまうと思います。でも、知ることの楽しさを教えてもらった子は、他人と比較するのではなく、自分なりに興味を持つこと、学ぶことを楽しめる人になるのではないかと思います。

今、親として望むことは、「学ぶこと」「知ること」は楽しい、どんなことでもいいから、夢中になれるようなことを持てる人になってほしいと思います。受験勉強は一人でもできるかもしれませんが、でも、同級生たちと意見を言い合い、笑い合いながら学ぶことは学校でないとできません。

出口先生の授業には「まちがい」や「失敗」をみんなの前ですることが恥ずかしいことでも何でもない、自分の意見を言えることが楽しい、人の意見を聞くことが楽しい。そんな空間に包まれていました。出口先生の長い教員生活のなかでも、3年間この授業ができたのはあまりないと聞き、本当に僕たちは幸運だったと思います。

今はお風呂で当時を思い出しながら、子どもたちに「どう？ 理科って面白いやろ？」と心の中で問いかける時間を楽しんでいます。

学ぶのは子どもの時だけではありませんので、先生方には、どうか、興味関心を持てる、好奇心旺盛な、そして、他人と比較するのではなく、自分が楽しい、面白いと思える何かを探し続けられる力をつけてやってほしいと願っています。

話がうまくまとめられませんが、久しぶりに出口先生とお話する機会を持ち、「ノーミソ通信」を読んで感じたことを書かせていただきました。このような勉強会に参加され、頑張ってくださいている先生方には、全幅の信頼をもって、保護者として全力で応援しています。

〈出口先生の授業には「まちがい」や「失敗」をみんなの前ですることが恥ずかしいことでも何でもない、自分の意見を言えることが楽しい、人の意見を聞くことが楽しい。そんな空間に包まれていました〉と山本君。仮説実験授業の授業運営法に束縛されて、教室を楽しい空間にできていたことがうれしい。

〈他人と比較するのではなく、自分が楽しい、面白いと思える何かを探し続けられる力をつけてやってほしいと願っています〉〈全幅の信頼をもって、保護者として全力で応援しています〉という彼の言葉は、仮説実験授業を実践する若い先生たちにきつと励みになると思う。いや、退職したボクにもうれしい言葉だった。

●仮説実験授業でしか得られない体験

中学時代の授業記録を読んで、「教室の風景や、当時の友達の色が一気によみがえりました。そんな授業他にありません」と山本君。授業記録を書いていない授業は、「たのしかった」という思い出はあるものの、くわしく内容を思い出せないことがほとんどだ。でも、授業記録を読めば、本当に30年前の授業であってもそのときの教室の様子が鮮やかによみがえってくる。仮説実験授業の授業記録は、子どもにとっても教師にとっても、過去のたのしい授業の空間へとタイムスリップできる素晴らしい宝物だ。山本君の言葉から、改めて授業記録を書くことの意義を確かめることができたように思う。

今、篠山サークルの若者たちが、子どもたちとたのしむために授業通信を書き始めるようになっている。その記録を読ませてもらうと、若い先生たちと子どもたちが生き生きと、そしてたのしく仮説実験授業を学ぶ姿が伝わってくる。きつと数年後、数十年後、今度は彼らが教え子とともに授業記録を読みながら仮説実験授業のたのしさを語り合うのだろうと思うと、思わずボクは微笑んでしまう。

★

教育現場から教育内容について語られることが本当になくなった。「その教材は学ぶに値するのか」「その教材は教えるに値するのか」という議論は消え去り、教育方法ば

かりの議論になっている。だけど、子どもたちに世の中にこんなたのしい考えるに値する問題があるのだということや、科学や数学や芸術などのすばらしさを感動的に伝えることがやはり大切だ。タブレットで情報収集力や意見を交換する方法を身につけることも大切かもしれない。しかし、もっと大切なものは「意欲と好奇心」であり、自分にも未知の世界を理解できるという「自信」であり、教室を同じくする友と意見を交わすことで知る「人間の多様さやすばらしさ」ではないか。

かつての教え子の小倉慶久君は、仮説実験授業を通して自分のものになったこととして、〈物事を考える過程の重要さ〉と〈様々な考え方や個性ある他者の認識〉と述べていた。また、山本君と同級生である松浦明日香さんは、ボクの退職のときに寄せてくれた文章の中で「私は〈世界の外の何か〉ではなく、〈世界の中の一人〉なのだ！ この時間で、私は初めて〈他者の中の自分〉を見出した」「一面的に〈友人〉としてしかとらえていなかったクラスメイトに、意外な論理性や頑固さ、ハッとするような閃きを見る度に、世界が色付いていくようだった。〈他者の中の一人一人〉を見つけたのである」とも述べていた。

山本君の「自分の仮説や考えを、みんなと共有、討論する楽しさ、自分の仮説に賛同してくれる喜び、仮説が当たった時の喜びや、期待を裏切られた時の驚きは、学ぶこと（発見すること）の楽しさを授業の中で体験できました。また、自分には考え付かないような発想を、友達が持っているのだということを知りました」という言葉は、小倉君や松浦さんの言葉と重なる。

仮説実験授業は科学の授業だ。しかし、そこで学ぶ科学の概念や法則以上に、子どもたちは仮説実験授業で多くのものを学んでいる。そして、そこで学ぶことは他の授業では決して得られない体験のように思えるのだが、どうだろうか。

だから、若い先生たちには自信をもって仮説実験授業を実践してほしい。山本君の文章には力をもらった。山本君、ステキな文章をありがとう！

2022.11.3